本朝列傳

共二十

内閣文庫
番號 和 34686
冊數 20 (1)
函號 155 75

内閣文庫
和書
類號 三四六八六
冊數 二〇
一五九 類 一一 架

75

155-75

国立公文書館
National Archives of Japan

1/50

本朝列侯傳序

自昔帝王以人文化生天下未始不資於史傳善者取以為法惡者用以為戒興於為善止於為惡於戲人不考古足以證乎今是竊憾摘候伯之履歷以悉筆書欲使人坐而知治亂興亡事跡博漁獵佞朝舊新之史傳間又窺秘閣之載籍未曾遺一才敵片善尚恐有或善善惡惡之靡或是々非々之弗公況其前後牴牾乖謬衆說紛紛者不少少究本探源而存其信而闕其疑如傳聞彰著畧書焉研精覃思十有余年乃編成名曰本

朝列侯傳于時延寶七未仲秋序

凡例

此編全不加憶説因正史以記之
雖因史傳以記之唯因書則不能無誤之者故因其家
以聞之正其誤疑紀之
本氏稱松平者省畧不載之是尊怖之故也且又其履
歴瞭然明而黄吻之童無不識之故不贅之
諸候之内二十有余家畧之是僉近世起家之氏族而
勲功亦不多故不能載之
先列候今其家衰僅有縱氏系者今川家上大友武田
等是也吾他日得餘暇則考之而已

本朝列候傳卷之一

前田　菅原

前田菅原利家ハ藏人其ノ高祖天ノ穂日命ヨリ
イツルト管見イマタ詳ヒラカナラス初ニ尾州荒
子ノ城ヲ築イテ以テオレリ荒子ト前田ムラト
相ハナルヽコト僅ニ十町許リ故ニ前田ヲ以テ
氏トス男子アリ利家ト号ス初名ハ犬後ニ又左衛門尉ト云
ソノ人トナリヤ寛仁ニ〆智勇出羣幼ナキヨ
リ右大臣信長公ニツカヘ度トメ従ハスト云フ
ナレ戦カフコトニ不能無軍功曾弘治二年信長
織田勘十郎信行ヲ誅スル信長ノ舎弟時其臣起黨

敵兵宮井勘兵衛ガ放ツトコロノ矢利家ノ面ニ
アタリ則馳討勘兵衛ヲノクビヲトタリ時十六歳
利家或時有故同朋ヲコロス信長コレヲイカル
謂幼若而好勇強後来ハカルベカラスト乃コレヲ
禁錮之仕ルヽヲユルサズ　永禄三年五月十六
日信長今川義元トタヽカウトキ衆ニサキダツ
テ敵兵ヲウツソノ首ヲヘタリ時ヲ十八歳　信長ヨロ
コベル色ナシ利家怒而蹈藏其首於泥中フタヽ
ビ進ンテ敵陳ニイリ一首ヲヘタリ信長尚未許
明年代永井氏トキニ利家又先ツノボラント進
ンテ敵ヲ討ツテ得首コノトキニアタリテ初前
日ノ罪ヲユルシ且賜赤縄　同八年九月十三日
攻江州箕作山ノ城トキ利家羣ニヌキンデ城門
ニイタル首ベニ級ヲ得タリ　天正三年五月二
十一日長篠會戰之時魁師トナル甲州ノ兵トタ
ヽカイキツヲ石脚ニカウムル　同十年能登國
石動山民人黨ヲタテ利家ノ命ニ違亂ヲ起ス利
家怒而コレヲウチ平ケント敵之首ヲ斬ル一一
千余級也　元亀元年摂州大坂ノ門跡顯如上人
光佐叛信長軍ヲ森口ノ邊ニイタシテ以戰信長軍
危ニナヽタリ利家為殿後大坂兵遂来ルヽアヲ
タウズ故ニ信長全軍帰　天正元年信長朝倉義

景淺井長政ヲ討滅シ後越前府中十一万石ヲ以テ
前田利家佐々内蔵介ニ破彦三々将二分賜ス　天
正十二年佐々内蔵介叛イテ一万人ヲヒキユ未
盛ノ城ヲ攻ムル利家之臣奥村堅クコレヲ守ル
翌日馳人急ヲ金澤ニ告利家加鞭ノ三千人ヲ率
後援トナル内蔵介解圍退去ス後日内蔵介クタ
ル秀吉越中国ヲ以テ利家ニ授ク且賜感書曰
今度佐々内蔵介企謀叛以多勢雖至于能州
奥郡可令發向之行引違推寄未盛城取圍已
及難儀之處奥村助右衛門尉盡粉骨之働堅
固持静之處其方早速為後攻被出勢佐々頭
分之首十二倒來當家無二之忠義大慶甚深
之至候恐々謹言　秀吉
天正十二甲申年
九月十九日
前田又左衛門殿

天正十八年前田利家上杉景勝毛利河内守秀頼
真田源五其兵三万五千上野松枝城ヲ攻ム城主
大道寺駿河守ヲヨビソノ子新四郎モトヨリイ
ドミタヽカワントスヽ而其ノ多兵ヲ見ルガユヘニ
アヘテ出タサズ城ヲ守ルヿ固拒之利家景勝急
ニ攻之大道寺父子降ル松山城主上田上野助使

家臣難波田伊賀守ヲメ松山ノ城ヲ守ラ而其身ハ在
小田原ノ城ニ利家景勝攻之難波田木呂根金子山田
ソノ勝可カラザルヿヲ知テ而クダル裝輪(マヤ)厩橋河
越ノ三城モ皆然リ又北條安房守氏邦ノ居城鉢
形ヲ攻テ而コレヲ下シ利家景勝來于小田原秀
吉ヲ執謁ス大ニコレヲ之賞セズ利家景勝且恨
ミ且疑テ而退ク秀吉近臣ニ曰テイワク是度カノ兩
將ノ功多カラザルトヤセズ然トモソノ數城ヲ拔ク
ヤ皆肯ニ其降ヲ焉其或一城ノ主兵ヲハ屠滅之或ハ
一城ヲシテコレヲクタラシム一宥一滅ノ法吾
深クコレヲ賞センノミ利家景勝聞之兵ヲ卒テ
攻八王寺ノ城々主北條陸奥守氏邁横地監物ヲ
メ本城ヲ守ラシム中山勘解由狩野一庵中丸ヲ
守ル近藤出羽介山下之陣ヲ守ツテ而其身ハ在
小田原ノ城大道寺駿河守難波田因幡守木呂子
丹守金子紀伊守山田伊賀守小幡上總介等景勝
利家ノ命ヲウケテ山下ノ陣ヲセム近藤出羽守
防戰メ死ス中山勘解由狩野一庵城兵ヲ集メテ
言テ曰ワレ氏邁ノ恩波ニヨクスルヿ日シ今大
兵來侵サバワレ必死耳汝カトモカラ遁ントホ
ツセバ則遁ルベシ我豈恨ンヤ衆僉ガイワク唯
是卿ラト共ニ死ナンノミ安メ遁走スルヿヲセ

シヤ中山狩野大悦スデニメ景勝利家ノ軍兵アリ
ノコトクニ中九ニ附中山狩野敢驚騒セズ矢ヲ
ハナツテ炮ヲ発バス城下死亡ヲトルモノスデ
數百人ニヲヨブ横地監物見之甚恐怖シ本城ヲ
ステヽ而遁去中山狩野三百ノ兵卒ヲヒキイテ
敵兵ト遇テ數戦ヒ數討而後又歸本城三百ノ衆
兵殘者唯十余人皆自殺 文禄中秀吉朝鮮ヲウ
タントシテ軍ヲ肥前国ニ發シテトキニ利家又
秀吉ニシタガツテ肥前ノ国名古屋ニヲモムク
陳營ニアリ秀吉輔佐ス 慶長三年秀吉ニシタ
イテ薨逝ス五奉行諸將モ皆ミツカラヲタテ
テ以テ相ヨカラズ 大神君ニ黨スル者ヲヽシ或
時利家ヲヨビ五奉行生駒雅樂親正ヲメ大崎少
將政宗福島左衛門太夫正則蜂須賀長門守家政
ニ言シム曰ヲノヲノ家康ムト縁家ヲムスブヤ
ク有リト聞ク故大閤將終時私ニ婚姻ヲムスブ
ノ事ヲ禁ス是天下ノシルトコロナリ今背其法
是則幼君ヲ欺ムクニニタリ政宗家政答曰此事
泉州堺市人今井宗勲所為也吾曾コレヲシラズ
正則曰我素ヨリ秀頼ノ親屬タリ 今内府公ニ
シタシムノ益親秀頼ニ執ラレトス再來 大神
君利家ヒマアリ細川忠興越中守聞之特田利長

第ヲトモラウ相言曰吾聞老中相黨而利家ノ威
勢ヲ藉テ以内府公ヲ拒マント欲彼等謀ラク利
家ハ老衰シ且病ニカヽリテ逝去セン丁歳ヲ終
ヲ可カラズ利長ハ年齢尤弱シ之ヲハカルニタ
ラズ如斯後來天下之政令石田增田カ胸慮ヨリ
出タリ權勢ヲ扶桑ニ震ハントメ揭焉愚ワラ〳〵
思ニ今時ノ両虎ハ内府公ト利家也利家
内府公相和セハ則老中等ソノハカリヨトヲウ
シナハンカ請君思之利長コレヲ可ナリトシテ
馳テ大坂ニ往イテ利家ニ告ク利家又然之病ヲ
タスケ小舟ニ掉シテ以訪フ大神君ノ旅郎ヲモ
ツテ加藤清正細川忠興墨田長政淺野幸長歩行
ニテ大神君ノ館饗應善盡シ美盡サル盃酒ヲ
ンシウセル丁數度
家臣盃酒ヲタヽマウ利家公ニ言曰此亭瀬街頭ヨ
ロシク向島ノ亭ニ移ルベシトコレニ依向島亭
ニ移居タマウ他日利家淺野長政ヲメ德山五兵
衛ヲソヘシム利家ノ臣大神君ニ言ハシメテ曰
吾今衰病日ニ厚シ風燭尚不久向來教撫利長ヲ
是幸ナラン時慶長四年三月十一日公許之且疎
闊アルベカラズ賜書同日大神君玉輿ヲ利家
ノ第マゲラル利家雀躍不少珍賂善美ヲツクシ

獻酬終後戸田越後守山崎内匠同ク次郎兵衛ノ
三人メシテ兵術ノ藝ヲミテ」レヲ褒賞シ玉フ且
彼ノ流ノ門弟櫻井六郎右衛門者招イテ此ノ術
ヲマナフ

愚按スルニ此藝術旧本邦ヨリテキタルト
コロヒサシ此ノゴロ大明ノ第子撰集武備
志ニイワク刀法ヲ以唯為和奴ノ藝載スル
ニ新影ノ法ヲモワテ恐クハ第子所考未博
長短ノ模形相異ナリトイエヒ以刀暴悪ヲ
害者理異邦本朝何リ有異乎シカラバスナ
ワチワノ術唐和俗ノミニトゾムベカラズ

漢ニモ又ワノ術ナカラズ字書曰刀ハ到ナリ言
心ハ志ノイタルトコロ物トシテ斬断セズト云
フナシ戸田之刀術傳ヘキタルトコロヒサシ昔年
室町公方ノ臣中條某シト云モノアリ此藝ニ長
ス山崎氏雜傳之早世ス故ニ傳受此術者少シヒ
トリ戸田氏此藝ヲ少ケツタヘ當世ニツタヘ鳴
ル又順ト云モノアリ兵術ニ達シ其力量絶倫タ
リ故ワノ刀ナ大刀ナリ或トキ戸田ト決勝負ヲ
戸田勝ツコトヲエタリ山崎氏ニ子アリリノ術
學ヲ戸田ニ々々死ノ後ソノヨ幼若ナリ又藝ヲ山
崎ニマナブ一人ハ盛玄ト号ス一人ハ次部左衛

門ト号ス他日盛玄修練ノタメ往美濃ノ国ニ居ス
国主義龍コレヲ器重ス此時新當流丘術者ニ鹿
嶋梅津ト云モノアリ願決勝負盛玄勝利ヲ得タ
リ弟治部左衛門開白秀次公之師範トナル治部
左衛門ハ秦加賀ノ利家ノ臣ナリ一男子アリ志
津嶽ニオイテ戦死ス又ソノ女ヲモツテ六左衛門
ニ嫁ス六左衛門ハ盛攻城ノ時先衆軍功ヲアラ
ワス為賞一万三千石ヲ賜ルトナリ印名ヲ改メ
テ戸田越後守ト号戸田ノ家系ヲツクヲモツテ
ノ故ナリ
前将軍家台徳院殿越後守ヲ幕府ニメレテ
其術ヲ學ブマタモトノ山崎左近将監三男子
ヲムメリ嫡ヲ内近ト号ス二男小右衛門末子
次郎兵衛ナリ左近曾朝倉義景ニ仕フ刀根山
戦場ニオイテ軍功アリ後ニハ五郎右衛門ト
アラタメ事大納言利家卿或時河合源内ト云
者五郎右衛門カ寢所コレヲサヽントホツス
五郎右衛門忽チ起テ源内ヲ殺ス源内カ親屬
相集テ彼ノ家ヲカコム兄弟三人多兵ノカコ
ミヲ挨破ル越前国ニ赴ク後年トシナカ召之
此三人ハ皆越後守カ甥也小右衛門ハ前江州
ヲ避テ往テ三河守秀康卿ニツカヘ卿卒後宰

相忠直卿小右衛門ヲ召シテ此三人ハ兵衛ノ
勝負ヲミント欲ス是ニヲイテ小右衛門ガ子
兵左衛門阿月次左衛門ト勝負ヲ決ス阿月負
ルヿヲ得阿月ハ有馬流ノ兵術者也又再タビ
新影流ノ田山奎左衛門決雌雄兵左衛門雄ヿ
ヲエタリ未子次郎兵衛大聖寺攻城之時小刀
ヲモツテ城中ニイリ武功ヲ顕ス後年大坂攻
城ノ時拔鬼軍功アリ頃年小野典膳ト云者
有リ初神子上此術ニ達シ或時盛玄力門弟伊
藤一刀齋ト勝負ヲ決勝負典膳負ク於是一
刀齋ガ門弟トナル一刀齋ガ秘術ヲ傳受ス

終ニ一刀齋ヲ殺ス自己ノ芳譽ヲ發ス上田攻
城ノ時戰功アリ世ニ真田七本鎗ト云アリ此
時典膳其一人ナリ其子孫此藝ヲ傳受ス幕府
ニ事今小野次郎右衛門ソノ末孫ナリ又曰新
法之工夫加フルヲモツテ名ツク新影流ノ上
泉伊勢守ト云者此術ニ長メ普ク此藝ヲ方
邦ニヲシヒロム今時是流傳繁多ナリ柳生但
馬守傳此流ヲ將軍家ノ師範トナリ專其術ヲ傳
フソノ余末流頗多ニメアケニ計フベカラズ
宮本武藏吉岡見坊等ソノ道ヲモツテ當世ニ
鳴ルモノナリ

本朝列侯傳巻之二上

前田

慶長四年閏三月三日利家攝州大坂ノ城ニ卒ス
男女數子アリ嫡ヲ利長ト号ス羽柴筑前守 二男
八利政初権四郎後能登守 三男八利知好修理 四男八利
光後利常ヲ称ス 五男利孝大和守 六男利貞備前守 女
子中川武蔵守光重室備前中納言秀家ノ室豊臣
秀次簾中後万里小路大納言光房卿ノ嫁 浅野紀伊守
幸長室 女子細川与一郎忠隆室忠興ノ嫡男也與父不
相善故ニ放逐之讓家禄于三男内記 利長家継家督勢威不
減利家時 同年利長在于国 公伏見ノ城ニマシ

マシテ万邦ニ振タマハト聞テ大夫大野修理大夫
治長土方勘兵衛雄久等相議ノ利長ノ威勢ヲカ
リテ以大神君ヲ拒マント欲スス謀アリ大野
治長土方雄久等常ニコレヲウカヾフ　公重陽
ノ嘉詞ヲコトブカントシテ大坂ノ城ニノボル
大野等雖伺之増田右衛門尉長束大蔵大輔大谷
刑部少輔三人コレヲ輔佐故ニ両人ノ謀畧違失
公念激ノ大野治長土方雄久等両人ヲ使テ常
陸國ニ配流他日　公使人ヲノ利長言曰太閤薨
去後諸侯各分裂メアイミズ是亂世之端也今足
下我ト相親マバ他モ亦異心ヲ変スベシ然則天
下安寧ナランカ君能コレヲオモヘ於是利長喜
之盟誓ヲ歃ス且リノ母芳春院ヲモツテ質トノ
東武ニ贈ル　大神君大ニ感悦アリミ孫女ヲモ
ツテ利長ノ男犬千代ニ嫁ス時十歳黄門利常是也
慶長五年石田三成秀頼ノ命ヲカリテ以テソ
ムク丹羽長重山口正弘石田ガ招キナルヘシ小
松ノ城ニヨツテモツテ東軍ヲ拒カンホツス山
口正弘石田カ招キナリト又大聖寺ノ城ニ拠ル
黄門利長志ヲ関東ニ通シ軍ヲ會津ニ發セシト
ス時ニ大坂ノ諸將伏見ノ城ヲ攻ルノ告アリ是
ニオイテ老臣ヲアツメ相議其臣諫曰小松ノ長

重ハ大領主ニシテ勇詩ニ京人ニ超エル渠若敵ニ黨
セハ吾軍利アルベカラズ今長重ト和解シカレ
ヲ前所伐逆徒可ナラン洞肅利長領之則石破齊
宮介ヲシテ長重ニ談遂ニ未果茲ニ山口玄番頭正
弘八月朔日小松城ニ來リ長重ニ謂ス曰吾軍卒
ニトボシフシ大聖寺ノ城ヲ守モルニ足ラズ願
クハ當城ニ入テ以テ共ニコレヲ拒守長重曰事
急ナルヲ以ツテ故粮米トボシキ難響多軍足下
速ヤカニ大聖寺ニ還堅ク拒守之設ヲセヨ利長
大聖寺ノ告ヲ攻ルノ告ヲ聞カハ吾後援トナル
速ニ軍ヲ發スベシトト於是山口正弘ハセテ大聖
寺利長先大聖寺ヲ攻又イテ以テ急ニ京師ニ赴
テ東軍ヲ援シト欲ス乃三田山ノ古壘ヲ修シ將
トシテ岡崎備中守勇士ニ入テ數百輩丹羽長重
ノ軍ノ來到ルヲ拒ガト要ス奥村伊豫守ヲメ金
澤ノ城ニ留主七月二十六日四万余騎ヲヒキイ
金澤ヲ發シテ軍ヲスヽム
此時洛中ニオイテ長重ノ小將坂井與右衛門
カ家臣寺西太左衛門擊利長之家人陣營ヲ造
修スルノ兵二人モツテソノクビヲ得タリ
大聖寺ニ赴ムク行程七里路小松ノ城ヲヨギル
長重之家臣寺澤勘石衛門仟候イテタリカベリ

テ曰敵既近卿ニ在リ長重檜ニノホリテコレヲ
見テイハク敵ハ多軍ナリト坂井與右衛門カ曰
凡軍ノ勝敗ハ多少ニヨラズ唯謀討之巧拙ニ在
ノミ利長小松ノ城ヲ攻ズメ直ニ大聖寺ニ赴ム
ク此時衆謂寺澤勘右衛門仆候ホ練ナリ寺澤コレヲキケ
リ長重曰吾レ山口ニ後援ノ約アリ軍ヲ大聖寺
ニ發セント時ニ衆諫曰今微軍ヲモツテ大軍ヲ
コヽニ當レハ利アラサルノミナラズイワユル
小敵ノ堅キハ大敵ノ擒ヲ坂井與右衛門獨リ謂
利長ノ軍大聖寺ニイタリテ今夜人馬ノ勞ヲヤ
スメ明日城ヲ攻ベシ須ク急潛ノコヽロ有ベシ
然ルニ吾軍半夜ニフイテイ小松ニ從フ大聖寺ノ
行程五里勝利アランコトヲ決セリ耳ツ利長ヲ擒コ
ニセントモ亦知ルベカラズ長重然ルトキニ城既
ニ陷而敵充城内ニ之ツゲ故ニ果サズ茲大谷邢
部少輔吉隆北国ヲ拒ガントシテ軍ヲ發シテ相
從フモノハ太津宰相高次朽木河内守元綱脇坂
中務安治同息淡路守安元小川土佐守同弟左馬
介戸田武藏守同息内記平塚因幡守木下山城守
赤座久兵衛木下宮内少輔與山雅楽介上田主水
高木法齋蜂須賀蓬菴之家臣也青山修理亮同息
主計修理ハ九国ノ城主四万石ヲ食長重之妹聟ナリ丹羽備中

守長正長重ノ弟也（藤枝ノ城主五万石ヲ食）凡其軍
二万余輩先堀尾吉晴之越前府中城ヲ屠拔キ去
年関東タマウヤコロ之城ヲリ其後利長ノ居城ヲ攻ントス
欲シテ金澤時越前北庄ノ城主青木紀伊守ツカ
イヲ大谷ニ馳テ時大谷敦賀ニアリ曰利長攻拔大
聖寺ヲ近日北ノ庄ヲ攻ルノ告有當城ハ守兵少乏
メ多軍ヲ拒ギカタシ故ニ城ヲヒライテマサニ
京師ニ入ラントスコヽニオイテ大谷敦賀ヲハ
ツレ使ヲ越前ノ府中遣曰早ク開城去レト守城
ノ將ハ堀尾宮内ヨノ時堀尾吉晴加ミ井弥八ノ為ニ創ラ
ル遠州ニ在リ戰カフコトアタワズ城ヲ開ヒテ出
奔スル利長ノ將軍ヲ金澤ニ班ヘシ路小松ヲヨ
キル丹羽長重老臣ヲ集相議曰敵吾地ヲ過ル軍
ヲイタシテ以コレヲウツベシ衆皆然之坂井若
狭守ヲヲ（坂井與右衛門カ男ナリ）留主城ニツカイス江
口三郎右衛門モノシトト為ル城外ニ在告テ曰敵
今過城外橋去コレヲ討可ナラカ是ニオイテ長
重門ヲ開イテ馳テ軍令ニ拘ハラズ進ミイタシ
テ敵ヲ擊ツ者ハ坂井弥五左衛門（與右衛門カ三男
後改土佐後年仕ニ藤堂和泉高虎）古田五兵衛澤野治左
衛門佐々太左衛門國七兵衛等ナリ利長ノ小將
長野九郎左衛門江口三郎右衛門ト相戰フ小松

ノ軍將坂井與右衛門大屋與兵衛悉ク北淺井西ノ鄉ニ出張ス此トキ利長兵命ヲ殞ス者ノ二十有五人長野九郎左衛門單騎而來ル小松ノ軍ヲ見ルニ矢炮ヲ調以テ此ヲサケテ本道ニ赴ク長重ノ家臣拜答吹大夫宮田小兵衛成田助九郎安彥清右衛門不破奎兵衛等羣ヲ又キンテ軍功有不破奎兵衛鉄砲中死

利長ノ軍漸ク退行ク長重ノ軍尚ヲ逐行利長ノ將山崎使ヲ太田但馬守ニ馳テ太田ハ土方雄久之連弟曰ク敵逐來ル吾軍マサニ勝利ヲ得ベシトノ瑞ナリスミヤカニ來テ吾軍ヲ援ケヨ太田將進軍長將山崎使ヲ太田但馬守ニ馳セ太田ハ土方雄久之連弟曰敵逐來ルワガ軍マサニ勝利ヲ得ベシ太田軍ヲスヽメントメ長重ノ臣坂井與右衛門此形勢ヲ察テ以為敵既欲挑戰今吾軍強テ戰ハヾ則敵軍小松ノ城ニ逐入シ一決セリ早ク此ヲ避クルニシカズ軍ヲ小松ノ城收メント也長重領之此度長重ノ軍功獨リ坂井氏カ謀ヲモツテノ故ナリ利長ノ弟能登ノ侍從利政一族ノ親ヲサケ能登国ニ據テ以關東ヲ拒ク利長土方勘兵衛雄久ヲメ之ヲ諫メシム利政ノ曰吾妻大坂ニアリ故ニ貴命ニ應スルヿ不能石田伏誅後能登国ヲ放逐セラル京師ニ往

ニ放遊ス臣名ヲ改見ル号八月上旬利長土方雄久
ヲイザナフテ軍ヲ發シテ西尾藤兵衛小松ニ來
長重ヲ制ス依之長重利長ト相和メ而小松ノ搦
口ニ會盟ス利長北庄ニ赴キ青木紀伊守一矩ノ
城攻ントス欲ス一矩豫城ヲ拠モツテ拒之志有ト
雖土方勘兵衛雄久頻之ヲ諫ム故ニ時ニ降伏ス
紀伊守罹病病其男右衛門佐利長ニ屬シ赴大津
大神君ニ謁ス紀伊守不日ニ〆死ソノ舊領ヲ
〆利長ニ賜ヘシム固辞之且右衛佐ニ賜ト欲ス
大神君肯ネ於是右衛門佐　大神君跡ヲクラ
フタ去ル利長慶長十九年七月十三日ニ卒ツス

凡リノ軍二万余輩先ニ堀尾吉晴カ越前ノ府中
ノ城ヲ屠抜去年從關東所賜之城也其後利長ノ居城ヲ攻ントト
欲ス金沢時ニ越前北庄ノ城主青木紀伊守使ヲ
大谷ニ馳テ時大谷在敦賀曰利長大聖寺ノ城ヲ攻拔テ
近日北庄ヲ攻ノ告アリ當城ハ守兵少之ニ〆而
多軍ヲ拒ギカタシ故開城京師ニ入ントスルニ
是ニオイテ大谷敦賀ヲ發使ヲ越前ノ府中ニ遣
曰早ク開城去レト守城之將ハ堀尾宮内吉晴此時堀尾
加賀井弥八郎ノ二サハル遠州ノ地ニ在戰カウフタクワス城ヲヒワイテ
出奔ス利長ノ將軍ヲ金澤ニカヘス路小松ヲ過
ル丹羽ノ長重老臣ヲ集メテ相議メ曰敵吾地ヲ

迫ル軍ヲ出以之等可シ衆皆之ヲ然リトス坂井
若狭守ヲメ城ニ留主セシム江口三郎右衛門斥
候ニ居テ城外ニアリ告曰敵今城外ノ橋ヲヨギ
リ去ル討之可シカ是ニヲイテ長重門ヲ開ハセ
テ軍令ニカヽワラズ進出撃敵者ハ坂井弥五左
衛門与右衛門カ三男後土佐ヲ改メテ古田五兵衛澤野
治左衛門佐々太左衛門囲七兵衛等ナリ利長ノ
小将長野九郎左衛門江口三郎右衛門ト相戰フ
小松ノ軍将坂井与右衛門大屋与兵衛悉北ノ
淺井西卿ニ出張ス此時利長ノ兵命者二十五人
長野九郎左衛門單騎而来此小松ノ軍ヲ見ルニ
ミルニ矢炮ヲ調メ以テ屯タムロス此ヲサケテ
本道ニ赴ムク長重ノ家臣拜答次太夫宮田小兵
衛成田助九郎安彦清右衛門不破圭兵衛等群ニ
又キンテ軍功アリ不破圭兵衛鉄砲ニ中ツテ
死ス利長ノ軍漸退キユク長重ノ軍尚ヲ逐行利
長ノ将山崎馳使太田但馬守大田土方雄久之連弟曰敵逐来
吾軍當ニ勝利ヲ得ントスルノ瑞也速カニ来而
援吾軍太田将進軍長重ノ臣坂井与右衛門此ノ
形勢ヲ察テ以為ラク敵既桃戰ントスル欲ス今吾軍
強テ戰ハヽ則敵軍逐入于小松ノ城使セリ矣シ
カシ早クヨヽヲ陸ヲ軍ヲ小松ノ城ニ収メシニ

ハ也長重コレヲカンジテ此度長重ノ軍功ヒトリ坂井氏カ軍功ヲ以テノ故也利長第能登ノ侍從利政一族ノシタメシミヲ避ケ能登國ニヨツテ以關東ヲフセク利長土方勘兵衛雄久ヲシテ之ヲイサニシム利政ノ曰吾妻大坂ニ在故ニ貴命ニ應スルヿアタハズ石田伏誅ノ後能登ノ國ヲ放逐京師ニユキテ放遊ス紀伊ノ名ヲ改見事ト號ス八月上旬利長土方雄久ヲイザナイテ軍ヲ鑁西尾藤兵衛小松ニ来長重ヲ制スコレニ依テ長重利長ト相和メ而會盟ス小松ノ橋ノ口利長北ノ庄ニ赴キ青木紀伊守一矩城ヲ攻ントト欲ス一矩アラカジメ城ニヨリ以テコレヲ拒ク志アリト雖土方勘兵衛雄久シキリニ之ヲイサメ故降伏ス時ニ紀伊守病痾ニ罹ル其男右衛門佐利長ニ屬シ大津ニ赴キ大神君ニ謁紀伊守不日ニメ死ス其臣領ヲシテ利長ニタヽフ固クコレヲ辞シ且ツ右衛門佐ニ賜ラレイヲ欲ス大神君不肯コヽニ於テ右衛門佐跡ヲ暗シテ去ル利長慶長十九年七月十三日ニ卒ス時春秋五十三利長実子十二第四之男利光ヲ以猶子トシテ其家ヲツカシム利光後利常ト改居領能登十六万石ヲ以テ利常ニ賜其書ニ曰

将軍家ノ婿為利長隱

加賀越中能登三箇國ノ事一圓ニ被仰付訖
テイレハ北旨ヲ守忠勤抽ヘキ者也仍如件
慶長十九年　御判
九月十六日　松平筑前守殿

利常ノ代ニ至テ初テ松平氏ヲ賜再来松平ト称
ス者也　同十九年之役十二月四日越前ノ魁帥
本多飛彈守同伊豆守等兵ヲスヽメ真田丸ヲ責
ル城兵コレヲ拒イ嚴密也時ニ利常ノ先駈井伊
直孝ノ軍士モ同ク爭進テ堀ヲワタリ高塀ヲ
コエント欲スニ及フ　台聞ニ達シ　大神君怒
タマヘ安藤帯刀直次ヲシテ速ニコレヲ退ヘキ
セシム戰場ニ至ル時敵兵矢炮ヲ放ツイ殆ト雨
睛ノ如シ屢タエニズ今命ヲ傳ヘ吾カ軍ヲメ之
ヲシリソカシム而歸ル　元和元年五月七日利
常先鋒ト為岡山ノ邊リニ向フテキト相タヽカ
フイ數回首級ヲ得ル三千二百余級也後年中
納言ニ任ス治元年十月十二日卒ス春秋六十六
歳　利常數子ヲ生嫡ハ筑前守光高二男淡路守利
次三男飛彈守利治嫡光高少將ニ任　將軍家ノ
御女ヲ嫁ス水戸寅門卿ノ女三十一歳ニシテ
父ニ先早世ス　利常ノ委女後野安藝守光晟ニ

嫁　利常ノ第大和守利孝始テ利常ノ家臣ト爲
將軍家コレヲ徴シテ列侯トス男有右近太夫豊
利也

本朝列侯傳卷第二之上

島津　源氏

島津忠久有右大將源ノ頼朝第三ノ男也頼朝曾
テ比企ノ判官頼員カ妹ニ密通シテ丹後局ト號
寵遇厚シ政子頼朝ノ本妻嫉妬ノ心深シ或時本
多ノ次郎ヲメシヅカイセシム本多其罪無ノ死
地ニツクニ忍ヒズヒソカニコレヲ携ヘ洛ノ市
中ニハシル洛ヲ出テ將ニ僻地ニ往カントス路
攝州難波ヲヨキル時ニ日既ニ沒ノ枝歩ニ躑躅
ス忽住吉ノ神社ニアタツテ偶妊孕之苦シ有リ
俄然トノ產ヲ催シ一男ヲ出生ス時治承三年

コノ時神明子母ニ垂瑞ヲ又白狐来テ産所
衛固ズコレヨリ其家狐ヲ以祥獸トス
本多又婦ト兒トヲメツサヘ往テ阿遏野ノ民家
ニ寓居ス後鎌倉ニ至頼朝ニ謁ス頼朝喜色ヲ動
メ而兒ヲメ島津ノ庄ニ在ラシムツ子ニ左右ニ
近仕ス後年建久七年大隅日向ノ二國ヲ封賜畳
後守ニ任島山重忠ノ女ヲ以テフレヲ嫁初島津
ノ庄ニ居住故島津ヲ以氏トス島津ノ庄ハ相模
ノ國ノ内ニ在忠久三子ヲ生嫡ヲ修理亮忠義
ト称ス二男固防守忠綱三男三郎左衛門尉忠直
其後栄久四年将軍頼經犬追物ヲ見射手ハ小山

新左衛門朝長氏家太郎駿河次郎泰村横溝六郎
太十四匹時忠義命ヲ栄将軍ノ左右ニ候シ射方
ノ故實ヲ言今至島津ハ犬追物射方ノ家タリ近
代ノ将軍モ又此事ヲ命ス建長元年十月島津忠
綱高ライノ山柄ヲ以テ鳥ノ名将軍ニ獻ス頼嗣
コノ鳥羽翼白メ而ユキノ如聲モ亦本邦ノ鳥ニ
異リ将軍甚タ奇異シ王フ忠義數子有後二男
久經筭裳ヲツギ久經忠宗ヲ生歌道ヲ嗜ム望
舟烟景ニ和歌ヲ賦ス或時吟咏メ曰其題ヲ不知
風渡留泉乃川能タ暮耳山陰涼之蜩ノ聲
忠宗ノ曾孫氏久ト號ス陸奥越前等ノ太守トス

コノ人卿馬ノ達人ナリ曾テ馬術ノ書ヲ撰ヒ嘉
慶中ニ卒ス 春秋六十 氏久二子有嫡ヲ元久ト称
ス義満将軍ニ事歴永中ニ卒ス 春秋四十九歳 二
男久豊國家ヲ承繼ス陸奥太守ニ任其子修理亮
忠國ナリ友久生友久忠幸ヲ生忠幸忠良ヲ生永
祿中ニ卒ス 春秋七十五歳 忠良二男子有嫡ヲ貴
久ト稱ス二男忠将右馬頭 忠久四子ヲ生嫡男義
久 修理太夫 天文二年ニ生ル落髪ノ龍伯ト號ス
二男義弘 初忠平兵庫頭 三男左衛門尉 歳久四男
中務太輔 家久飛彈守 久英ノ祖 義久之時ニ及海
内大乱レ列侯各〻合從連衡ヲ事トス坂東ニ北
條上杉有争戰フ北國ニ武田長尾小笠原村上有
ツ子ニ鬪擊スルイ休ニズ中国ニモ毛利尼子有テ
相争フヒトリ信長國之中間ニ有テ将軍ヲイタ
キテ其威權ヲ以テ尤強盛ナリ武田今川等ヲ族
滅メ以殆ト諸侯ヲ并呑スルノ氣有ト雖不幸ニ
メ家臣光秀カ爲ニイヤセラル然メ義久西藩之僻
地ニ在九國二島之諸將ニ歆メ戰フイ茲ニ年ア
リ其最モ心力ヲ勞スル者大友也 天正四年義
久伊東三位入道ト相メハカフ 伊東八日州半國
飯肥居 義久軍ヲ野尻口ニ發 在日州 伊東コレヲ
聞師ヲ帥テ来リ桃ニメ〻カフ利アラズメ敗走

ス島津シキリニ之ヲ逐ヘ伊東遂ニ社稷ヲ捨出奔シ往テ豊後國ニ寓居ス爾来日向國過半島津フレヲ領　同六年義久山田新介ヲメ日向國高木城ヲ守ラシム大友ノ兵来テ高木ノ城ヲ攻之告有義久モ亦山田ヲ高木ノ城ニタスケントス軍發先他土原ニ屯スコノ度島津右馬頭忠将伏兵ヲ設ケ而伴テ敗走スル爲以歇ヲ利ス大友ノイクサ之ヲ逐テ新介モ亦出兵以大友ノ逐トコロノ兵ヲ伐ステニ伏兵起テタヽカフ島津他土原ヲ發財部ヲ出豊後ノ軍ノ歸路ヲ絶ツ大友ノ兵力戰ス死創ノ者牧舉スヘカラス遂ニ大ニ敗走ス又新納武藏守肥後ニ入諸將ヲ謀ルニ而降服スル者多シ阿蘇倉原小島等也筑前国秋月モ亦大友ヲ叛キ來リ從フ　天正十二年右馬佟理太夫之援兵トス軍肥前ニ發龍造寺隆信ト相戰フ已隆信戰死ス此合戰鍋島ノ下詳ナリ　同十三年義久大友ヲ攻レト欲波野原ニ屯ス肥後豊後ノ境ニ在大友ノ兵出テイトミ戰フ　同年十二月二十五日新納武藏守六千余輩ヲヒキエ肥後國ヲ發ユイテ大友ト戰フ勝敗未決同廿八日島津イクサヲ大塚口ニ發大友ノ軍来テ力戰ス島津退去ス大友亦イクサヲ班ス　同十四年十

月島津義久ノ舎弟兵庫頭義弘朽綱之里ニ屯ス
豊後国在南郡ノ諸将大友ヲ背キ多義弘ニ従フ
者同國國ノ城主志賀親次大友ノ将隈フカシド
テ高メカメリ之ヲ守拒ス　同年同月二十七日
義久伊集院美作守白坂式部市地民部少輔平田
新左衛門等ヲメ千余騎將シム往テ高尾ノ城ヲ
カコミ城主堀中務藤井左近阿南但馬守先人ヲ
メ城將等ニ言シム曰降リ来レヲロシリ賞祿有
ヘシ城中相議メ曰今テキ大軍ヲ以テ急ニ城ヲ
攻城ノ危キイ彈指ノ中ニ有シカシ暫ラリ歇ニ
從フテ以後ノ謀ヲ待シニハ既ニ而質ヲ出ス島
津モ又質ヲ城ニ入以和平成ル然ノサツニノ諸
將言ヲ食テ以城ヨリ出ス所ノ質ヲ殺メ以徇フ
城將忿激スクナカラズ島津ノ質ヲ以生ラ城門
之外ニハリツケニス於是島津モ又城ヲ攻城兵
ヨリ之ヲ拒ク内外ハ戰死ノ者牧舉スヘカラズ
城將藤井左近阿南但馬守戰死ス時ニ日西嶺ニ
薄ル城ツイニ潰ル茲ニ阿南ノ一女子時ナ七歳
父ノ戰死ヲ見閨帳ニ入袴ヲ著父ノ腰刀ヲ帶シ
城ヲ出テキノ隊中ニ入其勢ヒ當ルヘカラズ島
津ノ兵イケナカラ之ヲ捕ト欲ス女子腰刀ヲ以
直ニ歩兵ニ向既ニ敵二人ヲ伐遂ニ自殺ス人皆

驚歎ス　同年同月島津家久朝日嶽ノ城ヲ圍ム
大友ノ家将柴田某カ居城柴田アラカヒメノ心ヲ
薩州ニ通故城ヲヒラク出テ家久ノ軍ニ加ハル
両軍ノ兵ヲ併セ井田ノ城ニ據ル星川ノ城ニモ
亦薩州ノイクサヲ割ツテ之ヲ守ラシム時ニ伐
伯太郎コレ定星川ノ壘ヲ攻既ニメ火ヲ放ツ井
田ノ城ニシタカフ其烟火ヲ望見柴田心驚シ柴
田カ妻子星川城ニ在今至先非ヲ悔ルノ色面目
ニ顯ル島津コレヲ察ノ城外ニ出シテ以柴田ヲ
殺ス　同年十月島津兵庫頭義弘同中務太輔家
久之両将豊後ニ入村里ヲ剽掠ス吉岡甚吉カ母
砂林新ニ一城ヲ鶴崎ニ構ヘ
甚吉カ父天正六年十一月十六日高木城ニ
於テ戰死ス甚吉今丹生島ノ城ニ在
近里ノ野人等ヲ募集メ隍ヲ深フシ門ヲ閉之ヲ
拒ク伊集院美作守野村備中守白濱因幡守ノ三
将三千余輩ヲ率シ来テ之ヲ圍攻イ數日而テ城
固メ潰ズ妙林白練ヲ以頭ヲ包長刀ヲサケ以日
夜城内ヲメクリ軍士ヲ戒メハケマス而テ等困
ノ氣力無然メラトシアナヲ城外ニ設薩州ノ兵
コレニ陷テ命ヲ殞トス者數十人其後島津ノ軍
漸ク一二ノ壘ヲ破ルシカレ𪜈城未板且ツ死創

ノ者勝テ計ヘカラズ城兵命ヲ殞スイ僅ニ十余
輩伊集院等相議メ中島立作ニツイテ妙林ノ近
臣和ヲ乞妙林謂ラク城中ノ兵疲レ粮モ亦乏シ
シバラクテキニ降テ以後ノ計畧ヲ待シ吾儕何
トカオモウ衆僉諾ス是ニ於テ城ヲ開出テ寓居
ス村里ニ島津ノ軍城ニ入テ守ル後年三将軍
薩州ニ班スノ時野村備中守妙林カ宅ヲ訪テ曰
吾今イクサヲ薩州ニ入ル汝従フ宜キヤ否妙林
カ曰吾一ヒ大友ヲ叛而薩州ニ降リ今再ヒ大友
ニ降ルカレ安ソコレヲ信シヤ當離別ヲ賀スベ
シトテ美少ヲ出以盃酒ヲスヽム燭ヲテシスル
ニ至野村ステニ沈酔シテ妙林ニ別ル妙林アラ
カジメ伏兵ヲ河邊ニ設野村カ河邊ヲ過ルヲ伺
フ而伏兵忽起テ之ヲ逐討薩州ノ軍周章シ或ハ
河水ニ溺レ或ハ戰死シ野村モ亦重創ヲ破リ日
州高木ノ城ニ入死ス或曰此時伊集院白濱モ亦
戰死ス妙林伐所ノ有級豊後ニ輸ス大友大ニ喜
ヒ且妙林ヲ賞ス
他日秀吉軍ヲ九州ニ發スルノ時妙林援兵
ト為八千余兵ヲ以テ仙石氏長曾我部氏ニ
從屬スシカレ氏兩将利ヲ失至妙林カ兵モ
亦過半戰死ス秀吉妙林カ絶倫ノ擧動ヲ聞

将ニ面接セントス遂ニハタサズ

同年同月島津中務太輔家久松尾ノ城ニ在居ス

豊後大野郡ニ在 先玄西堂ヲ佐伯太郎惟定ニ遣テ曰向来和親スヘシ然レ圧伐伯應セス還テ玄西堂及ヒ從来ノ兵士等殺以徇フ

本朝列候傳巻第二之下

島津

同年十一月島津義久之弟右馬頭義弘同中書家久ノ兩将使ヲ津久見ノ城ニ遣曰城開以降リ来レト城主鳩兵部加島三河守紀ノ主殿介等相議メ鳥銃放使者ヲ伐ツ故ニ和親遂ニ成ラズ義弘家久イカツテ船ニノリ二百余艘濱汀ニ至以急ニ城ヲ攻雙方戰死ノ者ソコハリ島津ノ軍カコミヲ解テ去ル 天正十四年十一月家久師ヲ帥テ豊後國ニ入轟村ニ屯ス伐伯内ニ在 翌日大友イクサヲ長池ニ發村名而桃タヽカフ兩軍死創

之有勝テ計ベカラス此行ヒ佐伯太郎軍功有他
日秀吉感書ヲ賜フ　天正十四年十二月家久豊
後國ニ入臼杵丹島ニ至ル乃イリサヲ分子村里
ヲ浸畧シ清水口ニ屯ス大友古庄喜西ノ兩將ヲ
メ出テ戰ハシム家久利無ク退ク吉岡甚吉大友
ノ將仁王座口ニ屯メ以島津ノ軍ト戰フ吉岡自
ラ歔ヲ伐首五級得勝敗未タケツセス　天正十
五年三月十七日島津家久遂ニ日州ヲ避ケ軍ヲ
薩州ニ班ス時ニ佐伯惟定ノ小將鳥銃ヲ放以之
ヲ逐家久ノ兵戰死ノ者三百余輩大友ノ軍猶追
来テ山嶺ニ上リ相ヲ而後互ニ軍引去ル

此時薩州ノ人軍駄物ヲ遺スコレヲ發イテ見
レハ肩衝一筒有コノ物源義輝將軍ノ寶物
ニメ曾テ大友義鎮ニタモフ義鎮コレヲ臼
杵紹薩州ノ軍村軍ヲ剽掠スルノ時偶之ヲ
得シカルニ今再ヒ佐伯惟定ノ手裡ニ入是
天乎其後　大權現ノ室庫ニ入名ヲ佐伯肩
衝ト有是也
天正十五年岡ノ城主志賀太郎親次肥後國ニ入
坂足原ヲ伐ントスル家初ニ島津ニ降ル有也三
月十七日豊後ヲ發阿蘇ニ屯ス而相議ス翌十八
日唐木ノ城ヲ攻レト坂足居所ノ城翌十九日新

綱成藏守伊集院肥前守入来院等日田發豊後小
田ニ屯ス肥後大友ノ軍僅ニナンヲ逸テ還ル
天正十五秀吉仙石權兵衛長曾我部元親兩將ヲ
メ遣豊後ニ以大友ヲ救ハシム島津家久時利光
ニ在豊後ノ地ノ名鶴城ヲカコム城主利光越前
守鑑教入道也城固メ稜ケズ然メ家久二將府内
ニ至ルヲ聞鶴カ城ノカコミヲ解直チニ兩將ニ
向タヽカフ仙石曰川渡以イトミ戰フヘキト長
曾我部カ曰不可也仙石終ニ川ヲ渡シ以及半渡
ニ島津ノ軍來リ戰フ仙石長曾我部ノ兵殆ト危
シ元親軍士ヲハケマシ力戰ス島津ノ軍機ニ乘
アラソイ擊イ頻ナリコヽニ於テ元親ノ男弥三
郎信親進ンテ敵陣ニ入終ニ首ヲ敵ニ授クル既
ニメ兩將狼狽ス家久大利ヲ得コレヲ逐フテ府
内ニ至梗間ノ城主刑部亟鎮秀秀吉ノ軍ト以テ
高崎ノ城ニ據ル家久急ニフレヲ攻鎮秀家久干
謂曰今幸ニ前過ヲ免我城ヲ下シ家久ダクスヽ乃
福永時次ヲ以城ニ入去ル然メ太閤豊前ニ至ル
ニ及家久進ンテ戰ハシトス伊集院等シハヽ是
レヲイサム是於テ軍ヲ薩州ニ班ス時ニ刑部亟
鎮秀福永ヲ攻テ島津ノ小將大利有家久ハセテ
松尾ノ城ニ入豊後ノ國ニ在三月十六日松尾ヲ

發山梅ノ嶺ヲ越ニトス後藤遠江守志賀親次之
臣ヒソカニ鳥銃二十口ヲ以家久ノ山上ヲ過ル
ヲ伺ヒ連ニ之ヲ放ツ誤テ家久ノ後駆ニ中ル家
久偶〻免レヲ得既ニ〆合戰又秀吉ノ軍豊前國
ニ至ルト聞高迫ノ城降伏ス高迫ハ肥後國ニ在
是新納武藏守ヨル所ノ城ナリ秀吉黄門秀吉ヲ
ノ日向國ニ發備前黄門毛利輝元黒田宦兵衛蜂
須賀阿波守稲垣彦六郎羽柴下總守宮部善祥坊
龜井新十郎福原右馬允等相從フ焉小早川ニ隨
有ハ来島黒川等都テ六万余騎又豊後ノ兵隆景
ニ加ハリ日州耳川ヲ渡又島津アラカジメ軍耳
川ニ出以〻〻カフ勝敗未決秀吉ノ軍テキノ陣
營ヲ焼直ニ高木ノ城ヲ攻山田新介梶所城潰ヘ
秀吉ノ將皆〻ムロス根代坂ニ或夜薩州ノ軍宮
部ノ營ヲ伐コノ時藤堂佐渡守高虎戰功有此時
宮部根猥ス島津ノ軍競来テコレヲ擊マフル其
後島津尤臣等集相議〻曰今秀吉ノ威風天下ノ
人物ヲノベフス雄雄未決ト云ヘ比向来計ヘカ
ラズ如ス和ヲ乞以二物ヲ全フセンニハ遂ニ伊
集院右衛大夫ヲ遣ノ黄門秀吉ニ説秀長秀吉ニ
告ル秀吉曰島津ノ家ハ右大將頼朝忠義ヲ封〻
ヨリコノカ〻其家系ヲダヒ〻ス吾之ニ滅スル

ニシノヒズトヽシテ而ダク之ヲ義久五月七
日薙髮染衣ニメ大平寺ニ於テ秀吉ニ謁ス秀吉
乃印領ヲタマフ義久陳露メ舍弟兵庫頭義弘左
衛門太夫俊久中書家久伊集院右衛門ノ太夫平
田美作守野村兵庫等質ヲ出ス是於九國悉ク平
キヌ　慶長五年石田三成叛逆ノ時秀頼ノ命ニ
ヨセテ諸將ヲマヽ子ク島津兵庫頭義弘彼招キニ
應シ軍ヲ濃州ニ發九月十五日島津使ヲ小西行
長ニ遣日我軍已ニ勝利之形アラハル戰桃ヘシ
ト小西不泉義弘念テ曰怯弱人用ユルニ足ラス
將ニ軍ヲ進レトス時松尾山之五將吾カ軍ヲ叛
故擁軍敗走ス島津横サマニ田中金森ノ軍ヲ伐
兵鈴甚鋭田中金森狼狽ス島津固ク吾軍ヲ備テ
以堅陣ノ中ヲ衝破將ニ軍ヲ班サントス黒田甲
斐守長政細川越中守忠興加藤左馬介嘉明等進
レテ之ヲ要ス島津軍士ヲメ悉ク廣原ニ坐サシ
ム鳥銃ヲ放チ黒田細川ノ軍卒死亡之者勝テ計
ヘカラズ此時島津中務家久纏ミヲ班メテキニ
接シ苦戰スル數回終ニ戰地ヲサケズ戰死ス中
書ハ兵庫ノ從弟而日向國佐土原之城主
大神君節制メ曰敵テ島津カ軍ヲ留メント欲ス
ルヿ勿レト遂ニ伊賀山ノ間道ヲ歴此所曾テ通

路無今初テ行ヲ啓リ尓来タ島津路ト名ク可謂
能戰地ノ險易利害ヲ知有ト　江州多賀ニ出高宮
河原ニ於旌旗ヲ揚ケ以分敵ノ兵卒ヲ集ム其威
儀凛々トシテ恐ルヘキ歟無カ如シ　此時諸軍餓ユ
牛馬ヲ殺シ以食フニ至已而村里ヲ剽掠粮米求ム
其後伏見ニ至リ泉ノ堺ニ赴ク住吉ノ濱ニ於テ
舟ヲ艤ヒ將薩州ニ飯ラントス海上豊後ノ灘ヲ
過ル時ニ日西ニ沒ス島津ノ後殿ノ船三艘森江
ノ湊ニ泊ルコノ時黒田如水安喜ノ城ヲカコム
一校大友ノ殘兵ヲル処ノ城ナリ地邪ヨリ援兵
ノ来ルヲ恐テ森江ノ港トニ於テ拒守ノ兵舟ヲ
設ク薩船黒田拒守ノ舟ノ火ノ影ヲ見誤テ薩州
ノ類船ナリト思コノ処ニ泊如水ノ舟之ヲ怪ミ
曰何レノ処ヨリ来ル舟ソト島津ノ舟驚テ纜ヲ
トリ加水ノ舟コレヲ逐フ已ニ東方白ナントス
於是薩州ノ類船来リ集テ黒田ノ舟ヲ逐フ薩州
ノ兵七八人ヲトリコニメ安喜ニ還ル　慶長十
四年島津奉ニ　台命軍琉球島ニ發島ノ長ヲ虜メ
来ル　大神君感悅且ツ琉球ヲ以島津ニ賜フ嶋
ノ長モ亦琉球ニ服ル尓来タ彼島嶋津ノ領トメ
今至貢物ヲ収納ス　慶長十九年之役心ヲ
大神君ニ通トモツナヲ解ト雖已ニ和平ヲ聞テ

軍ヲ班ス　元和元年之役而用中ニ於テ乃頼伏
誅スルヿヲ使者奉賀之戰場ヲ見ズ而吾國ニ還
ル　寛永中肥前國島原一揆蜂起ノ時島津下野
守常久五千余兵ヲ帥ヒ肥前ニ發シ軍功有リ
常久ハ忠親ノ子左衛門尉歳久ノ孫也歳久ハ兵
庫頭義弘ノ第也此家嫡義久龍伯男子無ニ依テ
義弘箕裘ヲ繼義弘家久ヲ生大隅守黄門家久男
女三十一人ヲ生嫡男早世二男完久國家ヲ治ム
父ニ先平ス

国立公文書館
National Archives of Japan